

## ◆歴史的風致の価値◆

### ■伝統行事・祭礼にみる歴史的風致(月見祭・百舌鳥精進)

- ・9つの氏子各町と百舌鳥八幡宮が位置する百舌鳥古墳群周辺
- ・「年番」と呼ばれる地域の協力体制
- ・各町が競い合いながら魅せる様々な宮入と熱気
- ・百舌鳥八幡宮をはじめ、氏子の家々
- ・「三郷巷談」で記されている古くからの“言い伝え”
- ・百舌鳥八幡宮を中心とする地域の信仰心



- 地域のコミュニティの求心力となり、百舌鳥八幡宮を中心に、地域の人々がひとつになる
- 伝統・文化・歴史を大切にしている心が今もなお地域に根付き、大切に守り継がれている



堺環濠都市全景

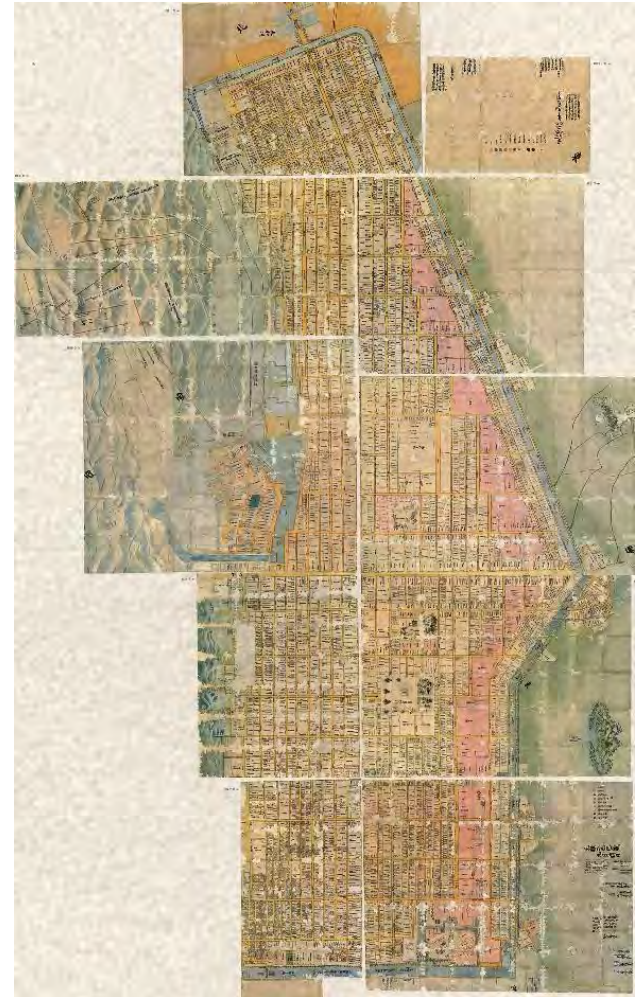
# 【環濠都市の歴史的風致】

平安時代末期、上町台地西側の南北に連なる砂堆上に市場や港が形成され、鎌倉時代以降、和泉と摂津の国境となっていた大小路をはさんで南北に分かれ「堺北荘」と「堺南荘」という荘園として発展した。

また、中世には有力町衆によって構成された「会合衆」による自由・自治都市、勘合・南蛮貿易の拠点として発展し、いわゆる「黄金の日々」の堺を築いた。

宣教師も多く訪れ、永禄4年(1561)ポルトガル人宣教師ガスパル・ビレラが本国に対して、「此町はベニス市の如く執政官に依りて治めらる」(『耶穌会士日本通信』)と記録している。

天文12年(1543)の鉄砲伝来後は、鉄砲の一大生産地としても栄えた。



「堺大絵図」元禄2年(1689年)

# 【環濠都市の歴史的風致】

中世の都市域は、慶長20年(1615)の大坂夏の陣では大きな被害を受けた。その後、徳川幕府の天領として、中世には濠の外であった堺廻り村落の田地が新たに濠内の市街地に編入され、都市域は中世よりも一回り大きく拡大した。

元和元年(1615)からは、「元和の町割」といわれる都市全域を対象とした統一的な街区整備が実施された。環濠都市区域では現在もこの町割が街区構成の基本となっている。

宝永元年(1704)、大和川が付け替えられると、土砂の堆積により海岸が埋まり、新たに新田の開発や港の修築が行われた。旧海岸線沿いに新たに濠(現在の内川)が作られ土居川と内川がつながり、現在の環濠の形態となっている。



明治44年(1911)には中心部を通る紀州街道に阪堺電車が開通し、今も「チンチン電車」として多くの市民に親しまれている。

このように、堺環濠都市区域は、徳川幕府により行われた「元和の町割」が骨格となり、今も古い街区や濠などの骨格をとどめつつ、伝統産業である刃物や線香などの伝統産業を継承した職住一体の生活様式や、また中世以来の伝統を引き継ぐ祭礼や茶の湯文化等を示す景観が伝わる地域である。

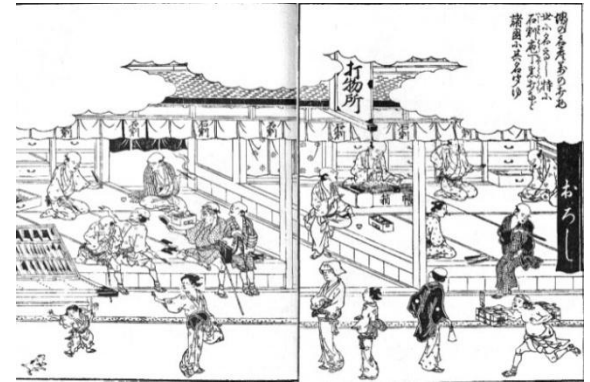
## 伝統産業にみる歴史的風致

### ■ 刃物

堺の刃物は、「煙草包丁」や「石割包丁」をその起源とする。鉄砲伝来以来、16世紀後半にポルトガルから伝わった煙草が国内で栽培され、煙草の葉を刻む包丁が大量に必要なために、堺で初めて「煙草包丁」が作られた。その後、徳川幕府は、享保15年(1730)に株仲間を31と定め、煙草包丁を堺の北部一帯に集めるとともに、その包丁に「堺極」の印を入れて幕府の専売品として出荷した。この地域の様子は、堺出身の歌人と謝野晶子によって「住の江や和泉の街の七まちの鍛冶の音きく菜の花の路」と詠まれている。

明治以降は、これらの技術を生かして、故障の多い明治時代の輸入自転車の修理や部品製造が盛んとなり、堺の自転車産業の始まりとなった。

現在も環濠都市区域を中心に刃物製造業者が分布し、一本一本丁寧に仕上げられた堺の包丁は、プロの料理人からも高く評価され、「堺打刃物」として本市内では唯一の国の伝統的工芸品に指定されている。



石割包丁の店舗の様子(和泉名所図会)



刃物製造所の建造物

## 伝統産業にみる歴史的風致

### ■線香

中世には、堺を拠点とした南蛮貿易の交易品として、白檀、沈香、伽羅といった香の原料が輸入されており、堺の薬種商が香の商いを始めた。「泉南仏国」といわれるほどに寺院が建立された堺では、その多くの寺院で線香が焚かれ、また香道が風流人の間に広まったとされる。

その起源についてはいくつかあるが、明治35年(1902)の『堺の薫物線香』沿革史では「天正年間、堺宿屋町大道薬種商、小西弥十郎如清ト云フ人、渡韓ノ際彼地ニ於テ線香製造ヲ伝習シ来リ堺ニテ製造ヲナシタルヲ我国ニテ線香製造ノ初トス」と紹介されている。

今でも高級線香は熟練職人の手によって調合されており、香料の調合率などは、それぞれの製造元の秘伝とされ、時代に合わせて工夫を加えながら受け継がれている。厳選された天然香料と職人技の妙が合わさり、独特の「調香」を施して完成した堺線香は、香りの芸術品と称されるほど奥深いものであり、大阪府知事指定伝統工芸品に指定されている。



『住吉堺名所並に豪商案内記』  
明治16年(1883)




線香を製造・販売する建造物

## ◆歴史的風致の価値◆

### ■伝統産業にみる歴史的風致

- ・「元和の町割」の古い街区や濠などの骨格が今も残る地域
- ・江戸時代からの工房や店舗の名残を感じる古い町並み
- ・刃物や線香などの伝統産業を育む職住一体の生活様式

- 
- 「ものの始まり、なんでも堺」の言葉に示される通り、新しいものを取り入れる気風や柔軟さを持ち合わせている
  - 世界に誇る匠の技が息づいている

## 伝統行事・祭礼にみる歴史的風致

### ■住吉祭における神輿渡御祭(おわたり)

国宝住吉大社本殿は、文化7年(1810)に造替されたもので「住吉造」といわれるものである。

堺は古くから住吉大社領であり、宝永元年(1704)の大和川の付け替えにより地続きでなくなって以降も、現在まで「堺の住吉さん」と呼ばれるように、堺の町との深い関係を有している。

住吉祭は7月の海の日(旧暦の7月15日)の神輿洗神事から始まり、8月1日の夏越祓神事、そして神輿渡御祭が行われる。神輿が紀州街道を大阪市側の安立町から大和川を渡り、大和川で大阪衆から堺衆への「ひきわたし」が行われ、その後堺市の宿院頓宮まで練り歩く。





## 伝統行事・祭礼にみる歴史的風致

住吉祭礼図屏風【右隻】



イエズス会宣教師フロイスによる1562年の記事に「住吉社は堺の郊外約半里のところ、市の人々の行楽地となっている広野にあり、堺のまちに神輿が来ていた」と記されている。江戸時代の様子は「住吉祭礼図屏風」(堺市指定有形文化財)などからも伺うことができる。一時期は神輿が自動車で運ばれていたが、平成17年からは45年ぶりに大和川を歩いて渡る「お渡り」が復活し、年々盛大に行われている。